2012年秋季大会報告

2012 年10月28 日（日）に青山学院大学渋谷キャンパスにて2012年秋季大会が開催されました。午前の部は「イスラームと教育」部会のセッションで、秋葉淳氏（千葉大学）の司会のもと、上野雅由樹氏（東京外国語大学・日本学術振興会特別研究員）による「帝国末期オスマン・アルメニア人の学校選択」、藤波伸嘉氏（東京大学大学院総合文化研究科・特任助教）による「アラブ・トルコ・タタール-青年トルコ革命のメディアと政治」の二報告がなされました。なお、本セッションは日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）「オスマン帝国における教育の連続性と変化（19世紀～20世紀）」（研究代表者：秋葉淳　研究課題番号：23520859）研究会との合同開催で行われました。

午後の部は「教育と福祉」若手部会のセッションとして、河合隆平氏（金沢大学）の『総力戦体制と障害児保育論の形成―日本障害児保育士研究序説』（緑蔭書房、2012年）の合評会を開催しました。報告者は高岡裕之氏（関西学院大学）と塩崎美穂氏（尚絅大学短期大学部）の両氏、司会は三時眞貴子氏（広島大学）・岩下誠氏（慶應義塾大学）が務めました。なお、本セッションは日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）「教育「支援」とその「排除性」に関する比較史研究」（研究代表者：三時眞貴子　研究課題番号：23531000）研究会との合同開催で行われました。

これらの模様は次頁にあります報告をご参照ください。

「イスラームと教育」部会セッション報告

帝国末期オスマン・アルメニア人の学校選択

上野雅由樹（日本学術振興会特別研究員）

2012年10月28日、比較教育社会史研究会にて研究発表をする機会をいただいた。以下にその概要を報告させていただきたい。

ムスリムの非ムスリムに対する優位という原則のもと、多様な宗教宗派に帰属する人々を内包したオスマン帝国では、1856年の改革勅令により、多宗教多宗派からなる従来の帝国的編成を維持しつつ、ムスリムと非ムスリムの不平等を是正し、平等原則のもとに両者をオスマン国民として統合することが表明された。そのために帝国政府が打ち出した施策というのが、非ムスリムの官僚登用であり、統治下の非ムスリム諸集団のなかで最も積極的にオスマン官界に参入したのが、アルメニア人キリスト教徒だった。では、アルメニア人オスマン官僚はどのような教育的背景を有していたのだろうか。

こうした関心から帝国末期に作成された官僚の履歴簿を調査した結果、明らかになったのは、アルメニア人オスマン官僚の「無節操」とも言うべき選択である。制度上、オスマン政府は初等段階での宗派別学と、中等段階以上での多宗派共学を目指したとされる。確かに、アルメニア人オスマン官僚のうち、7割程度が自らの属する宗派共同体の学校に行っており、当時帝国政府が整備しつつあった中等教育機関、専門高等教育機関を経て官途に就く者も多かった。しかしその一方で、正教徒やムスリムなど他宗派の初等学校に行く者、アルメニア共同体で初等教育を終えた後に、アルメニア教会と敵対していたはずのカトリックやプロテスタントのミッションスクールで学ぶ者、フランスやイタリアに留学する者、ムスリム向けのマドラサで学ぶ者、フランスのユダヤ人が「東方」のユダヤ人を啓蒙するために設立した団体の学校を選ぶ者もいた。

極めつけは、イスタンブルのエユップ地区出身のミフラン・エフェンディである。彼は、アルメニア共同体の学校を終え、オスマン官界に入る前に、スーフィズム（イスラームにおいて内面を重視する思想）の修道場で学んだという。ミフランが修道場で具体的に何を、どれだけの期間学んだのかについて史料は語らないが、当時、ムスリムのなかには修道場でつてを得て官途に就く者もあったことに鑑みれば、ミフランが同様の道をたどった可能性は十分に考えられる。改革勅令によって機会の平等が実現されつつあるなかで、アルメニア人は、ムスリムの場合には選択困難な、自由な学びの階梯を通じて社会的上昇を図ることができたのである。そして、1890年代半ばにアルメニア人の虐殺問題が生じた後も、（用いた史料の性格上、時代による官僚数の変化は論じ得ないが）少なくないアルメニア人がオスマン官僚として帝国のなかで生きることを選んでいた。

さらに注目すべきは、こうした多様な教育的背景を持つアルメニア人を、オスマン政府が官僚として登用し、外務省や電信局外国通信課、検閲局など、重要な部局に配属していたことである。先行研究では19世紀以降のオスマン政府側は、キリスト教徒臣民に不信感を抱いていただとか、留学やミッションスクールを目の敵にしていたかのように描く。しかし、財政面でも人材面でも余裕のなかった末期のオスマン帝国にとっては、多様な人材をいかに活用するかがより重視すべき要素だったのであり、イスラーム主義的と評される時代においても、非ムスリムを切り捨てることで帝国の統合を強化ことが目指されたわけではないのである。